

## 初夏の色彩に思う

どこまでも青い空、目に眩しい新緑の輝き。光に満ち生命の躍動に富んだ、最も美しい季節の到来です。しかし、それはどこか哀しみをも誘う景色ではないでしょうか。

その、取り返しのつかないような哀しみを紛らわすように、人々は行楽に駆り立てられるのではないかと、わたしは思っています。昨年に引き続き、今年のゴールデンウィークも思うにまかせない日々になってしまいました。人々の心に消化できない「哀しみ」だけが残らなければよいのだけれど、と思います。

### ■ 光と青と緑と

福岡伸一さんと志村ふくみさんは、それぞれ生物学者、染色家としてすぐれた業績を積みながら、同時に随筆家としても比類ない仕事をされています。この二人は「光」と「青」と「緑」について、興味深い知見をもたらしてくれます。

福岡さんによると、虹を通して光のスペクトラムを分節すると、一番外側は、赤、次に橙、黄、緑、青と並んで一番内側に紫がきます。内側の光ほど波長が短く、エネルギーも強いので、青はエネルギーの強い光なのだそうです。厚い水や空気を通して遠くまで到達する青色を感じることで、人間は水のありかを察知してきた、というのです。

福岡さんの指摘で面白いのは、青が生存に必要な色であるだけでなく、それ以上踏み出すと危険な色、生と死を分ける境界の色でもあるという点です。都会の夜にはLEDの青い光が溢れているけれども、その光が霊界を思わせる冷たい印象を与えるのも、それが原因なのかもしれないと、福岡さんは言います。

染色家の志村ふくみさんは、藍の染色がいかに難しいかを教えてくれます。藍の染料は「作る」とは言わず、藍を「建てる」といいます。職人たちは祈りの塔を建てるような心持ちで、甕の中で発酵する藍と向き合ってきたのです。藍甕のなかで成長し熟成し老いてゆく藍色は深みの感覚を我々に教えてくれます。福岡さんの言う「それ以上踏み出すと危険な」領域さえ、藍は醸し出すのかもしれない。

志村さんは「光」と「藍」と「緑」について、深い洞察をもたらします。少し長くなりますが、引用させていただきます。正絹で織り上げた錦のように美しい文章です。

草木の染液から直接緑色を染めことはできない。この地上に繁茂する緑したたる植物群の中であって、緑が染められないことは不思議である。植物染料の中でたった一つ、神は大切なものを忘れたのであろうか。

しかし、そうではない。より深い真実を私たちに伝えるために、神の仕組まれた謎ではないだろうか。久しい間、私はそう考えつづけてきた。（『色を奏でる』ちくま文庫）

緑色は染液から直接染め出すことはできませんが、光の色にもっとも近いといわれる黄色を青色にかけ合わせることで緑が得られます。<sup>かりやす</sup>刈安、くちなし、きはだなどの植物で染められた黄色の糸を藍甕に浸けると、輝くばかりの美しい緑が生まれるのだそうです。志村さんは先ほどの文章に、次のように続けます。

やはり緑は生命と深いかわり合いをもっていると思う。生命の尖端である。生きとし生けるものが、その生命をかぎりなくいとおしみ、一日も生の永かれと祈るにもかかわらず、生命は一刻一刻、死にむかって時を刻んでいる。とどまることがない。その生命そのものを色であらわしたら、それが緑なのではないだろうか。（前掲書）

化学染料を混ぜ合わせることで、好みの緑色は手に入れることはできるのでしょう。しかし、その緑は決して自然の景色のなかには溶け込まず、容易に退色してしまいます。「混ぜ合わせる」のではなく、黄色の「光」と藍色の「闇」とが「交わる」ときに、本物の緑が現れます。それは、生命そのものの営みを表すとともに、生者が死者を悼むことによって、死者と交わることに似てはいないでしょうか。

## ■ 死者を悼むこと

話は少し脱線します。

わたしは、死者を悼むことなくして相続の仕事をしてはいけないと、勝手に心に決めています。真夏の暑い盛りに暗い色のネクタイを締めて相続の話し合いに向かうとき、若いスタッフがそのような暑苦しい姿では、かえって相続人に気を遣わせてしまい、ホスピタリティにもとるのではないかとわたしに直言したことがありました。

その度胸は尊しとします。しかし、申し訳ないけれども、これがわたしの死者を悼む流儀であって、その気持ちがなくなってしまうと、自分が何をしているのかわからなくなるのです。そんなことより、ホスピタリティやら顧客第一主義やらの、薄っぺらなビジネス本のような仕事をして、君に与えられたイノチの素材が泣くだろうと、スタッフにそう言いました。化学染料を混ぜ合わせて、塩梅のよい効果を求めるような安易な仕事をしてはいけないと、特に若いひとには言いたいのです。

青い空、緑の輝きには、やはり「哀しみ」がひそんでいて、それは、生きることの哀しみのひとつの現れに過ぎません。その哀しみに真摯に向き合うことによってのみ、志村さんのいう「神の仕組まれた謎」に応えることができるのだと思います。

（所長 瀬戸 英晴）